

極薄の和紙職人 鎮西 寛旨さん

ちんせい ひろよし



0.02ミリの文化財を守る



再発見ニッポン

社を営むハンス・J・ド

「文化財修復はスーパ
ーニッチだが、各国がそ
れぞれの文化を大事にし
ている」と、販路の将来
性に手応えを感じた。

薄さ0.02ミリの和紙は、原紙として人気があった。レスのカーテンのように現在、需要は低迷。活にふわふわとなびくが、路を見いだしたのが文化財修復だった。

「職人という名にあぐらをかき、利用者の要望に応えようとせず、研究努力を怠ってきた」。もともと和紙業界には納品先との業務に口を挟まないという慣習があった。業界の弱点を分析したうえでPRに奔走した。

高知県日高村の「ひだか和紙」の5代目社長、鎮西寛旨さん(48)は2013年、若手社員らと取り組んで極限まで薄く仕上げた和紙づくりに成功した。「国宝級から個人の宝まで守る」と意気込み、現在の販売先は30カ国に上る。

同県の土佐典具帖紙(てんくじょうし)はちぎり絵やタイプライター

0.02ミリアを実現した翌年以降、米国の文化財保存修復学会などの会場に足を運び、和紙の製造工程などを説明し要望に耳を傾けた。修復師を学会のワークショップに同行させて修復方法を実演したり、海外から発注が入れば県内の試験場と研究に取り組んだりした。

「文化財修復はスーパニッチだが、各国がそれぞれの文化を大事にしている」と、販路の将来性に手応えを感じた。

修復・保存、30カ国に販路

リスラーさん(81)は鎮西さんを「欧州の文化財を守るエンジニア」と評する。木材パルプから作る洋紙は酸性のインクや湿気で古くなるとポロポロに崩れてしまう。そこに和紙を貼り付けて補強すると、両面印刷された文書でも裏面の文字がそのまま透けて見えるほど、現物に近い形で長期の保存が可能になる。

和紙職人を目指していたわけではなかった。20歳の時に渡米し、大学のビジネススクールに通った。金融業界に進む将来像を描いていたが、3代目社長だった父、芳男さん(73)の体調不良をきっかけに帰国。包装材の会社に勤めて流通を学び、02年にひだか和紙に入社した。

和紙づくりの工程を学びながら営業で御先を回った。どこで和紙が使われるのか、不満はないのか。「『しつこい』と思われるぐらい数年がかりで回った」。新たな利用方法を模索した。

研究にも力を注いだ。和紙づくりは原料となる植物「コウゾ」を蒸して繊維を取り出し、水に浸してちりを手作業で何度も取り除く。最終工程は機械で漉(す)くが、昔と変わらぬ手作業が薄さの肝だ。原料や水の配合、機械が漉くスピードを繰り返して調整した。

江戸時代の古文書が閲覧できる国立公文書館(東京・千代田)の修復係長、平野はな子さん(38)は「丈夫でめくりやすくなる」と鎮西さんの和紙を重宝する一人だ。

海外諸国が自国の文化を継承するように、日本を広めるのが自らの使命だ。国産コウゾの生産量は減っているが、海外の原料でも国産並みの透明度を実現したい」と意欲を見せる。和紙が秘める可能性に懸けた挑戦は続く。

政治献金に150万円流用

和歌山の社会福祉法人

省の違反 厚労省の通知

13年度にも県外の社会福祉法人やNPOに計38万円の寄付をしたことが、市の監査で発覚した。市指導監査課の担当者は、「監査で2回



山形県山形市中央区 山形博多博覧会

集結

山・鉾 無形遺産祝い

国連教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化

文 船津靖美
写真 沢井慎也